

『福岡発、仁川経由、雪の萬代橋行き』

～AIが導く“最適解”とは～

I: 夢に見た橋

その夢は、あまりにも鮮烈だった。

灰色の空、頬を刺す冷気、そして視界を埋め尽くす白い粒。その向こうに、重厚な石造りのアーチが連続して伸びている。橋だ。美しい、連続アーチの橋。

俺、一ノ瀬タカシは、その橋の真ん中で誰かを待っていた。顔は見えないが、魂が震えるほどに愛しい誰か。彼女もまた、俺を探して雪の中を歩いている。目が合った瞬間、世界の色が変わる――。

十二月二十五日の朝、目が覚めた俺の鼓動は早鐘を打っていた。

不思議なことに、その日のSNSのトレンドには「運命の夢」という言葉が踊っていた。どうやら、世界中の何組かの男女が、同じ場所で出会う夢を同時に見たらしい。ロマンチストな俺は、直感した。これは予知だ。俺の運命の相手が、あの橋にいる。

約束の日時は、夢の中の感覚が告げている。十二月三十一日、正午。

俺はすぐにスマホを取り出し、記憶に残る橋の形状を検索窓に打ち込んだ。

『連続アーチ 石造り 橋』

AIが弾き出した無数の画像の中に、夢の風景と合致する形状があった。三つの優美なアーチが水面に映り込んでいる。

「これだ……」

画像のロケーション情報は**「福岡県」**を示していた。

俺は興奮のあまり、夢の中の「寒さ」や「白い粒」のことをすっかり失念していた。俺の意識は、画像と夢の形状が一致したという事実と、場所が判明したという高揚感だけに支配されていた。

一方、数百キロ離れた東京のマンションで、相沢ユキもまた同じ夢の余韻に浸っていた。

けれど、彼女のアプローチはタカシよりも冷静だった。彼女は夢の中で感じた、足元の感覚を覚えていた。キュツ、キュツ、と靴底で踏みしめる雪の感触。

『連続アーチ 橋 雪景色』

彼女のスマートフォンの画面に表示されたのは、日本海側の都市にある、雪化粧をした美しい橋の画像だった。

「ここ.....新潟」

二人はそれぞれの確信を胸に、別々の場所へと旅立つ準備を始めた。橋の名前など、現地に行けばわかる。重要なのは、そこに「運命」が待っているということだけだった。

II: 絶望

十二月三十日、午前十時。

福岡空港に降り立ったタカシは、レンタカーを走らせて目的の座標を目指した。博多の街は年末の活気に溢れ、日差しは柔らかく、コートがいらないほどの陽気だった。

ナビに従い、川沿いの道に出る。車を停めて土手に立つと、目の前には、確かに夢で見た通りの優美な三連アーチがあった。

「ここだ、間違いない」

タカシは満足げに頷き、橋のたもとにある石碑に目をやった。

『名島橋』

そうか、名島橋というのか。彼は橋を見上げた。青空。穏やかな川の流れ。しかし、その名前を確認した瞬間から、胸の中に正体不明の違和感が黒いインクのように広がり始めた。

「.....何かが、違う」

決定的に欠けているものがある。

タカシは目を閉じた。夢の記憶を、必死に手繰り寄せる。あの日、夢の中で俺は何を着ていた？ 厚手のダウンジャケットだ。マフラーを巻き、吐く息は白かった。そして、視界を遮るほどの.....。

「雪だ」

タカシは目を見開いた。

夢の橋は、雪に埋もれていた。だが、今の福岡に雪の気配など微塵もない。天気予報を見ても、向こう一週間は晴天だ。

間違えた。

血の気が引いていくのがわかった。俺は、場所を間違えたのだ。形状だけで判断し、重要な気候条件を見落としていた。震える手でスマホを取り出し、AIアシスタントを起動する。音声入力の声が裏返った。

「名島橋に似ている、兄弟のような橋.....そして、今、雪が降っている場所はどこだ？」

AIは数秒の沈黙の後、無慈悲なほど冷静な音声で回答した。

『名島橋のデザインの参考元となった橋、あるいは類似した構造を持つ橋として、新潟県の**萬代橋（ばんだいばし）**が挙げられます。現在、新潟市中央区の天候は雪。積雪深は二十センチメートルを記録しています』

「萬代橋.....！」

画像検索をして、息を呑んだ。これだ。この重厚感、この風景。俺が立つべき場所はここだったのだ。現在時刻は三十日の正午過ぎ。まだ間に合う。タカシは急いで交通手段を検索した。福岡から新潟へ。

『検索結果：直行便、満席。経由便、満席。新幹線、乗り継ぎを含め本日および明日の指定席は全て満席です』

年末の帰省ラッシュだ。あらゆる交通機関が飽和状態にある。

「キャンセル待ちは？」

『空席待ちの予約数は既に定員を大幅に超えています。確保できる確率は〇・〇パーセント未満です』

画面に表示された「空席なし」の赤い文字が、タカシの網膜に焼き付いた。絶望が、物理的な重さを持って肩にのしかかる。運命だと思った。直感を信じて動いた。その結果が、このざまだ。

同時刻、新潟。

信濃川のたもとにあるホテルの窓辺で、ユキはカーテンを開けた。眼下には、鉛色の空の下、白銀の世界に横たわる石造りの橋が見えた。六つのアーチが連なる、重要文化財。

「萬代橋.....」

彼女は呟いた。夢で見た景色そのものだった。牡丹雪がしんと降り積もっている。美しい景色だが、彼女の心は不安に塗りつぶされそうだった。

明日、本当に彼は来るのだろうか。

そもそも、ただの夢だ。いい大人が夢を信じて、年末に一人で新潟まで来るなんて滑稽かもしれない。「もし誰も来なかったら.....」彼女は曇ったガラスに指先を当てた。冷たい。その冷たさが、孤独をより一層際立たせた。

Ⅲ：仁川空港へ飛べ

福岡の川沿いで、タカシはスマホを握りしめたまま立ち尽くしていた。名島橋の美しいシルエットが、今は皮肉にしか見えない。自力で思いつくルートは全て絶たれた。だが、諦めきれない。あの夢の感

覚は本物だった。ここで行かなければ、一生後悔する。

彼は最後の望みを託し、AIに対話モードで話しかけた。

「なあ、頼む。どんな手段でもいい。金がかかっても、時間がかかってもいい。明日の正午までに、福岡から新潟へ移動するルートを教えてくれ。世界のあらゆる可能性のあるルートを探してくれ」

人間の常識では考えないルート。AIの膨大な計算能力だけが導き出せる解。数秒のローディングが、永遠のように感じられた。

『一ルート、提案可能です』

AIの無機質な声が響いた。

『福岡空港から韓国・仁川国際空港へ飛び、そこで新潟行きの国際線に乗り継ぐルートです。これならば、残席があります』

「韓国.....経由？」

国内移動のために、一度海外に出るというのか。常識外れだ。だが、これしか道はない。

「予約してくれ。今すぐに！」

タカシはレンタカーを乗り捨てんばかりの勢いで空港へと引き返した。

十二月三十日、深夜。

タカシは仁川国際空港のトランジットエリアにいた。窓の外は異国の闇だ。新潟へ向かう便の出発まで、あと数時間。順調なフライトだったが、タカシの心臓は休まることを知らなかった。時計の針を見るたびに、胃が締め付けられるような焦燥感に襲われる。

(ユキ.....もしかしたら、彼女の名前はユキというのかもしれない)

夢の中で呼びかけた名前がおぼろげに蘇る。彼女は今、どうしているだろうか。もしかしたら、もう諦めて帰ってしまったかもしれない。

「頼む、待っていてくれ」

明けて十二月三十一日、午前。

新潟空港に降り立ったタカシを待っていたのは、白銀の世界だった。昨夜からの大雪で、空港は混乱の極みにあった。到着ロビーを出ると、タクシー乗り場には絶望的なほどの長蛇の列ができていた。道路状況が悪く、タクシーが戻ってこないのだ。

「これじゃ間に合わない.....！」

現在時刻は十一時十五分。約束の正午まで、あと四十五分。ここから萬代橋までは車で二十分の距

離だが、この雪だ。渋滞も予想される。その時、駅方面へ向かうリムジンバスが発車しようとしているのが目に入った。

「すみません！ 乗ります！」

タカシはキャリーケースを引きずり、閉まりかけたドアに身体を滑り込ませた。バスはのろのろと走り出した。窓の外は視界不良に近い吹雪。車内のデジタル時計が無情に時を刻む。十一時三十分。十一時四十分。

バスが新潟駅に到着したのは、十一時五十分だった。

「あと十分……」

タカシはバスを飛び降り、スマホの地図アプリを開いた。

目的地、萬代橋。『距離、約八〇〇メートル』。タクシー乗り場を見る。やはり長蛇の列。道路は雪で渋滞し、テールランプが赤い川のように連なっている。車よりも、自分の足の方が速いかもしれない。

いや、速い。走るしかない。

「うおおおおっ！」

タカシは覚悟を決めた。キャリーケースを小脇に抱え、雪の積もった歩道を走り出した。冷気が肺を焼き、雪が足を取る。革靴はすぐに濡れそぼり、足先の感覚が失われていく。

八〇〇メートル。舗装されたトラックなら数分の距離だ。だが、この悪路と荷物が体力を削り取る。すれ違う人々が、狂気じみた形相で走る男を振り返る。構うものか。

息が切れる。足が重い。だが、視線の先には、信濃川の向こうに架かる石造りのアーチが見えてきた。夢で見た、あの橋だ。

IV: AIが結ぶ運命

十二月三十一日、十一時五十八分。

萬代橋の上は、吹きすさぶ風でさらに寒さが厳しくなっていた。ユキは橋の中央で、白い息を吐きながらスマホの時計を見た。

あと二分。

人通りはまばらだ。時折、観光客らしきグループが通り過ぎるが、彼ではない。

「やっぱり、ただの夢だったんだ」

ユキの心に諦めの色が広がった。身体の芯まで冷え切っている。これ以上待つのは、身体的にも限界だった。もう、帰ろう。

そう決意して踵を返そうとした時、ふと疑問が浮かんだ。萬代橋には、上流側と下流側、二つの歩道がある。もし彼が来ていたとして、反対側の歩道にいたら？ この雪の中、広い車道を挟んだ反対側の人影を確認するのは困難だ。

最後に一つだけ、確認しよう。彼女はかじかむ指でスマホを取り出し、検索窓に打ち込んだ。

『萬代橋 恋人 どちらの歩道』

AIアシスタントが即座に回答を表示する。

『統計的傾向およびSNSの投稿データによると、上流側の歩道は信濃川の流れと街並みが美しく見えるため、プロポーズや記念撮影のスポットとして選ばれる確率が七〇パーセント以上と高くなっています』

「上流側……」

今、私がいるのは下流側だ。ユキは最後の賭けに出ることにした。道路を横断し、上流側の歩道へ移動する。

同時刻。

タカシは心臓が破裂しそうなほどの息切れの中、萬代橋のたもとに到達した。汗と溶けた雪で全身ずぶ濡れた。目の前に広がる橋を見て、彼は立ち止まった。

「歩道が……二つ……」

右か、左か。ここで選択を誤れば、八〇〇メートルを走り抜いた意味がなくなる。すれ違ってしまふ。彼の脳は酸素不足で思考停止寸前だった。自分の運を信じるか？ いや、俺の直感は一度福岡で外れている。

頼れるのは、論理とデータだ。タカシは雪に濡れた画面に向かって、祈るように叫んだ。

「萬代橋！ 恋人！ どっちの歩道だ！？」

AIは即答した。

『上流側の歩道が、ロマンチックなシチュエーションとして好まれる傾向にあります』

「上流……！」

タカシは残った力を振り絞り、上流側の歩道へと駆け上がった。正午の時報が、街のどこかから微かに聞こえた気がした。

雪が激しく舞う中、橋の中央付近に人影があった。厚手のコート。白いマフラー。タカシは足を止めた。喉が焼けるように熱いが、その痛みすら忘れた。

ユキもまた、向こうから走ってくる、スーツケースを抱えた雪だるまのような男に気づいた。髪は濡れ、肩で息をし、必死な形相をしている。けれど、その目はまっすぐに自分を見ていた。

夢の中で見た、あの瞳だ。

二人は数メートルの距離まで近づき、立ち尽くした。言葉はいらなかった。ただ、安堵と喜びが、冷え切った空気を温めていくのを感じた。

「.....福岡に行ってたんだ」

タカシが苦し紛れに、最初に発した言葉はそれだった。ユキはきょとんとして、それから涙ぐみながら笑い出した。

「馬鹿ね。.....でも、よく辿り着いたわね」

「AIのおかげだよ。韓国経由で来たんだ」

「韓国？ ふふ、本当に馬鹿ね」

「君は？ なんでこっち側に？」

「私も、AIに聞いたの。恋人たちがどっちにいるべきか」

タカシは空を見上げて、大きく息を吐いた。

「そうか。俺たち、最後は同じものを信じたんだな」

二人は歩み寄り、冷たい手と手を握り合った。その瞬間、夢の続きが現実のものとなった。

人間の不確かな直感と情熱。それを補い、道を切り開いたAIの冷徹な知性。その二つがツイン・アーチのように支え合い、二人の運命はここに結ばれたのだった。

萬代橋の上、雪はまだ降り続けている。だが、繋いだ手のひらの温もりだけは、決して消えることはなかった。